

## 審査の結果の要旨

氏名 田中智志

本論文は、18世紀半ばから19世紀半ばのアメリカにおいて「人格形成 (character formation)」の概念が教育の主導的概念として成立し定着した過程を、同時代の道徳哲学、政治思想、宗教思想の展開を踏まえて探究している。アメリカの近代公教育における「人格形成」の概念の歴史を主題とする本論文は、この概念が子どもの自然本性の道徳的可塑性を主張したスコットランド道徳哲学に由来することを論証するとともに、革命期の共和主義論争の中でこの概念が登場し、南北戦争前後のコモンスクール運動においてリベラル・プロテスタンティズムによって教育概念として確立し定着したことを実証している。

本論文は、序章において「人格 (character)」を「性格」という心理学概念ではなく「人格」という教育概念に定位した歴史的経緯を哲学的に検証したうえで、第一章でフランクリンの思想を考察し、彼の「ハビトゥスのヴァーチュ」(習慣行動の道徳的価値)が「人格」としての内面性を含んでいなかったと指摘する。そして第二章で18世紀後半にスコットランド道徳哲学を導入したウィザースプーンによって「内在的神性」(道徳センス)を教育する意味で「人格形成」の概念が成立し、公教育思想の基礎が形成されたと論述される。

第三章では19世紀初期の共和主義者、ラッシュ、ジェファーソン、ウェブスターらの「人格形成」の概念が検討され、彼らの教育論もスコットランド道徳哲学の影響のもとに展開し、この概念が政治的統治の思想と結合した様態が描出される。そして南北戦争前後のコモンスクール運動における「改革者」の思想を考察した第四章において、「人格形成」の概念がリベラル・プロテスタンティズムによって人間の内面の道徳形成という宗教運動に支えられて普及した展開が提示される。

さらに第5章において本論文は、19世紀半ばの試験、教科書、クラスによる業績と競争等の学校の制度化が「人格形成」の概念に及ぼした影響を考察し、この概念が保持していた道徳の基礎としての内面の「神性」が次第に失われ、「競争」や「成功」などの世俗的価値を意味内容とするものへと変貌した歴史が叙述される。

本論文の考察を総括した終章ではアメリカ公教育制度の思想的基盤を問い、市場経済の発展による「位階的分化」から「機能的分化」への社会構造の移行が、有用性規範を強化し「人格形成」概念の世俗化に拍車をかけたと結ばれている。

本論文は、アメリカ革命前後から南北戦争期にいたる教育論において「人格形成」の概念が中心論題であったことを提示した点、その「人格形成」概念がスコットランド道徳哲学の「道徳センス」に由来していることを多くの文献を渉猟し論証した点、「人格形成」概念が共和主義論争において政治統治の概念と結合し、リベラル・プロテスタンティズムに支えられて「内面の神性」を含意していたこと、さらに公教育の制度化においてその「神性」が次第に失われ世俗的価値に置き換えられたことなどを解明した点において、独創的な知見を提供し、アメリカ教育思想の歴史研究に多大な貢献を行っている。よって、本論文は、博士(教育学)の学位論文として十分な水準に達していると評価された。